書評

鈴木正嗣 編訳
『野生動物の研究と管理技術』
2001年11月・文永堂出版
定価20,000円(消費税含まず)

酪農学園大学 助教授
浅川満彦

本書は，米国における野生動物と生息環境の研究・保護管理方法について包括的に解説した本で，今回，日本で野生動物の保全を中心的テーマにする日本野生動物医学会あるいは野生生物保護学会に所属する専門家32名により訳出された。研究者のみならず関連行政機関にも有用な実用書としてばかりではなく，調査上の心得や動物福祉など「技術以前の問題」にも言及され，データ解析や統計処理の基礎に関する記載もあり，関連学部・研究科生の教科書・参考書としても有効であろう。また，日本でも科学的な野生動物の保護管理が求められている昨今，この書籍が重要な資料の一つになることは確実である。よって，色々なところで，本書書評は掲載されるであろうが，ここでは，主に獣医学的な側面から本書を眺めたい。

本書は28の章で構成されるが，特に既存の獣医学に密接に関連する部分，すなわち，当該学部の学生が，専門科目をこなした後，無理無く理解できうるのは次の章である。第1章「研究と実験の設計」，第4章「野外研究における野生動物の適切なケアと利用のためのガイドライン」，第5章「野生動物の捕獲と取り扱い」，第6章「大型獣の化学的不動化」，第8章「性判別と齢査定」，第11章「野生動物研究の生理学的手法」，第12章「野生動物の栄養学的分析手法」および第13章「野生動物の死因の評価」(以上を「第1群」と称する)。いずれも，野生動物ばかりではなく，動物園動物やエキゾチックペット動物を扱う(あるいは，扱うであろう)獣医師や学生も，必ず読まなければならない内容であろう。ただし，若干の脊椎動物の分類(学)や生態(学)の基礎的知識，鳥類学の初歩，飼料学などの事前学習が必要である(各獣医大学低学年レベルの野生動物(医)学教育が展開されているので，問題は無かろうが)。

読者に，野外調査や野生動物医学実習の経験，自然史に対する強い興味などが備わっておれば，第7章「野生動物の標識方法」，第14章「水中・陸上の生息地における無脊椎動物の採集」，第15章「ラジオテレメトリー」，第17章「狩猟管理」，第18章「野生動物被害の加害種の判別と防除」，第19章「都市野生動物の管理」，第20章「絶滅の危機に瀕した種の回復と管理」，第22章「植生のサンプリングと計測」，第23章「生息地の評価法」，第24章「生態学的影響評価」，第25章「野生生物のための湿地管理」，第26章「野生動物のための農地管理」，第27章「野生動物のための牧野管理」および第28章「野生動物のための森林管理」(以上を「第2群」と称する)なども十分理解可能であろう。もちろん，今，野生動物を材料に卒業論文を書いている学生諸君にとっては，極めて有益かつ重要な情報源であることは明らかである。当然ながら，国・地方自治体の保健所や環境関連のセクションなどに勤務される獣医師にとっても，実際的な重要項目が記載されており，一度は目を通される方が良い。

残った章(「第3群」と称する)，すなわち，第2章「データの分析」，第9章「野生動物個体群の生息数の推定」，第10章「脊椎動物による陸上の生息地と食物の利用の測定」および第16章「個体群解析」の理解には，中程度の統計学の知識が前提条件ではあるが，獣医学をバックグラウンドで野生動物の保護管理の職に就く(あるいは，就こうこうとしている)獣医師や関連テーマの博士論文作成中の大学院生などは，これらを，まず，一読すべきであろう。第3章「野生生物の管理と研究における小型コンピュータの利用」と第21章「地理情報システム(GIS)」は，原著者が記したように日進月歩の分野であり，それぞれの運用にあっては，個別の最新書にあたるべきであろう。両章では，極めて基礎的かつ概念的な事項が扱われており，これら分野の入門編としての役割を果たしている。

この機会にわが国の獣医大学への要望をしたい。もし，いまだに第1および2群を理解できうるような基礎的な項目が，野生動物医学の低学年レベル向け教育で扱われていないのなら，大至急，用意をすべきである。これは，昨今議

論に上る「獣医学教育改革」以前のレベルである。第2(一部)および3群については，これらに密接に関係する個体群動態学に密接に関連した統計学などを選択科目とともに，選択科目として独自に開講するか，拠点大学などで開講して他大学受講制度などにより，獣医学部の上級者かマスターレベルで習得する機会をご用意いただきたい。

若干の注文をしたい。この本は基本的に米国の事例を扱っているため，法律や動物などがは我々日本人には馴染みが薄い。したがって，日本における関連法規の解説や訳者注などは適宜必要であろう(本訳書には一部の章を除き，訳者の注は無い)。また，巻末付表で，本書に登場した生物名が一覧表になっているが，原書と同じように英名が最初に掲載されている。しかし，和名を最初にして五十音配列などにして，学名，英名(できれば科名も)を掲載いただくととても助かる。

ところで，私は，この翻訳本の編集会議を兼ねた輪読会に参加した。時は1996年1月19日から21日，場所は北海道苫小牧演習林宿舎である〔このオリジナルは発行までに7年を要したとのこと。その翻訳本である本書も刊行までにほぼ同じ期間を要している点(翻訳の途中の1996年にオリジナルが改訂され，本書もそれに合わせて最新版の翻訳に切り替えられている)は，いかにこの分野の書籍発行が難しかったかが理解できる。最近の獣医大学や獣医師会などの野生動物医学に対する理解の高まりは，そのようなマイナス要因は一掃されていると願いたいが〕。当時，私は，その年の4月から開始予定の「野生動物学」開講に向け，苦悶していた時期で，それを気遣ってか，その輪読会に部外者の私を編訳者の鈴木正嗣氏が誘って下さった。訳者のほとんどの方が集合して，激しく討論をした。その時配布されたメモや参考資料，粗原稿などを引っ張り出して，分厚い本になったものと比較して眺めていると，6年近くたっているにもかかわらず，あの熱気が伝わってきた。

実際，英国野生動物医学の研究留学帰国直後，約3週間をかけてこの本を読んだ。向こうで日本の野生動物医学のレベルがいかに低いか実感したものであったが，本書発行により，一気に追いつくことになろう。とても嬉しい。鈴木氏は，「これからは日本版の『野生動物の研究と管理技術』も必要だ」と語っておられたが，私としても全く同感であり，その刊行に期待したい。